

成城大学図書館の新たな蔵書、田安德川家旧蔵『五經正文』

山田尚子

はじめに

先頃成城大学図書館に収蔵された図書のうち、特に貴重なものの中に、田安德川家旧蔵の『五經正文』がある⁽¹⁾。本書は、薄茶色の水玉紙表紙を持つ大ぶりの版本で、儒家の学問の中核を担う『五經』（新注本）の経文が訓点なしの白文で刻された、所謂無調整版本である。やや後印ながら、朱筆の訓点が全卷に渡って隈なく、しかも極めて丁寧な書き入れられており、田安家の蔵書印と相俟って、一見して素性の良さが見て取れる貴重な版本である。本稿では、その特徴およびそこから派生する問題点などを紹介

し、今後、本資料を用いた研究や教育への架橋としたい。なお、『五經正文』の「經」字は対象資料の表記に従ったもので、その書名を表記する場合のみ「經」字を用い、そのほかは通行の字体を用いる。

一、資料の概要

最初に、成城大学図書館に所蔵される田安德川家旧蔵『五經正文』（以下、必要に応じて田安家旧蔵本と呼ぶ）の書誌的な事項を略述しておく。

五經正文 周易一卷 尚書一卷 毛詩一卷 春秋一卷

(登録番号 Y335746~57)

明翁溥校

明暦二年(一六五六) 刊後印據明嘉靖三十一年

(二五五二) 翁溥校刻本

田安德川家旧蔵 江戸後期訓点校注書入

薄茶色水玉紙表紙(二八・二×二〇・七糎)。左肩に題

簽(朱筆による子持ち棹)あり、「易經 上(下)」

「書經 上(□)」「詩經 上(下)」「春秋 上(下)」

「禮記 一(一~四)」と墨書。右側に各冊の内容に該当

する篇題を打付にて墨書(題簽と同筆)。右肩に「十

九番」と墨書(題簽および目録とは別筆)。押八双お

よび包角あり。

白口、四周双辺(約二一・〇×一五・七糎) 有界、每半

葉一〇行、毎行一九字、双黒魚尾対向。経毎に張付を

改む。

第十二冊『禮記』本文の後に校刻識語を附刻す「嘉靖

壬子秋九月甲辰諸暨翁(溥)謹識」

刊記(第十二冊『禮記』最終張裏)「明暦二年丙申春

三月仲旬/令改正開板者也梓人」

刊記(裏見返)「皇都書林/松梅軒/中川茂兵衛/西

村市郎右衛門/植村藤右衛門/河南四郎兵衛/長村半

兵衛/同友吉郎/小林庄兵衛」

表紙右下に印記「田藩文庫」(墨・陽・方)、各冊首に

印記三顆「田安/府芸/臺印」(朱・陽・方)、「獻英

樓/圖書記」(朱・陽・方)(以上、田安德川家)、「時

枝/藏書」(朱・陽・方)。

全冊にわたり、朱筆による訓点校注の書入あり。

本書は、『五經』の経文のみを刻した版本である。近世

の時期に日本で刊行された整版本の漢籍を「和刻本」と呼

ぶが、和刻本には多くの場合、訓点(返点や送り仮名、振

り仮名など)が本文とともに附刻される。それは、日本人

が漢籍を読解するために、その手助けとなる訓点の存在が

どうしても欠かせないものだったからである。ところが本

書には訓点が附刻されておらず、その代わり、全巻に渡っ

て朱筆の訓点(および校注)が、いわば一糸乱れぬとも

いうような、極めて整然とした様子で書入れられている。

まずこの点が、本書の大きな特徴といえよう。

さらに、本書の特徴のうちで第二に挙げられるのは、田

安徳川家の旧蔵書だという点である。各冊の表紙の「田藩文庫」、序の冒頭に捺される「田安府芸臺印」および「獻英樓圖書記」は同家の蔵書印である。本全体が版面に比較して大ぶりなのは、本としての格の高さを顕著に示すものであろう。本書が儒家の学問の中核を担う『五経』だという点とも関わり、武家の教養を支える書物としての一面が窺われる。

『五経』とは、儒家の代表的な經典、すなわち『周易』『尚書』『毛詩』『礼記』『春秋』を、学ぶべき五つの經典と定めてそのように呼んだものである。『五経』が「五経」として定まったのがいつのことか、その時期は未詳だが、前漢の武帝の時代（紀元前二世紀）には董仲舒の進言により五経博士が置かれ、これにより、孔子にはじまる儒家の学問が国の正統的な学問として認定されることとなった。一般に「四書五経」と言われるうちの「五経」はこれを目指す。

この田安家旧蔵本には、『禮記』の本文の後に「書刻五經正文後」と題された識語（跋文）が附刻されている（書名はこれに従った）。この識語には「於簿書之餘躬自校録付梓人刻之江西（簿書の餘に於て躬自ら校録して梓人に付

し之れを江西に刻す）」とあり、その末尾には「嘉靖壬子秋九月甲辰諸暨翁（溥）謹識」とあることから、本書は嘉靖三十一年（一五五二）に諸暨の翁溥（一五〇二―一五五六）が本文を校正した上で刊行した明版を底本とし、それに拠って版を起こして翻刻刊行したものであることが知られる。この、嘉靖三十一年翁溥校刻本を底本とするという点が、本書の第三の特徴である。

ところで、学問対象としての『五経』には、多くの注釈が作られた。それらの注釈は、成立した時期に応じて大きく古注と新注との二つに分けられる。すなわち、南宋朱熹（一一三〇―一二〇〇）を中心とする朱子学（程朱学・宋学）的注釈を新注、それより前のものを古注と称する。田安徳川家旧蔵『五経正文』には、『五経』の經文のみが収載され、注釈は省かれている。ところが、經文に先立つ序には、新注の序が採用されている。以下に各経第一冊の序を列挙する。

- （第一冊）「易序」（闕名）・「易傳序」（程頤）
- （第三冊）「古文尚書序」（弘安国）・「書集傳序」（蔡沈）
- （第五冊）「詩傳序」（朱熹）
- （第七冊）「春秋胡氏傳序」（胡安国）

(第九冊)「禮記集說序」(陳澧)

このうち、「易傳序」は、程頤(一〇三三～一一〇七)

による『易經』の注釈書(『周易程氏伝』)の序、「書集傳序」は蔡沈(一一六七～一二三〇)による『書經』の注釈書(『書集伝』)の序、「詩傳序」は朱熹による『詩經』の注釈書の序、「春秋胡氏傳序」は胡安国(一〇七四～一一三八)による『春秋』の注釈書(『春秋伝』)の序、「禮記集說序」は陳澧(一二六〇～一三四一)による『礼記』の注釈書(『礼記集說』)の序である。これらはいずれも各經の新注本に附された序であり、従つて本書の經文は(本書自体は經文のみで注は附されないものの)、新注本のテキストによつて作られたことが判明する。

一方、『五經』のうち、『周易』『尚書』『毛詩』は、宋代以降「易經」「書經」「詩經」と呼ばれるが、本書の卷首題、版心題、尾題にあつては呼称が統一されておらず、宋以前の呼称と宋代以降の呼称とが混じり合つた状態で表示されている。以下に本書の卷首題、版心題、尾題の状態を各經ごとに示す。

(第一・二冊)

卷首題「周易」。版心題「周易」(序および總目)、「正

文易經」(第四張まで)、「易經」(第五張以降)。尾題「易經」。

(第三・四冊)

卷首題「尚書」。版心題「尚書」(序および篇目)、「正文書經」(第四張まで)、「書經」(第五張以降)。尾題「書經」。

(第五・六冊)

卷首題「毛詩」。版心題「詩經」(序および總目)、「正文詩經」(第四張まで)、「詩經」(第五張以降)。尾題「毛詩」。

(第七・八冊)

卷首題「春秋」。版心題「春秋」。尾題「春秋」。

(第九～十二冊)

卷首題「禮記」。版心題「禮記」。尾題「禮記」。

前述のように、本書は新注本だと考えられることから、各經の名称は「易經」「書經」「詩經」「春秋」「禮記」とあるべきで、外題はそれようになってゐる。水玉紙表紙は原裝だと考えられるから、この本を享受した近世の日本人には「易經」「書經」「詩經」「春秋」「礼記」という名称が定着していたのであろうが、底本の明版においては、必ずし

も統一されていなかったことが窺われる。各経の書名について、本稿では巻首題を重視し、これに従うこととした。

二、田安家の蔵書と学問

前節でも言及したように、本書は田安德川家の旧蔵書である。田安家は、江戸幕府第八代將軍徳川吉宗（一六八四～一七五二）が、將軍後継問題に対応するために、將軍家により近接する形で立てた御三卿の筆頭である。享保十六年（一七三二）正月、吉宗次男で、家祖の宗武（一七一六～一七七二）が江戸城郭内の田安台に官邸を賜ったことが田安家の興りという。

田安家の蔵書は、享保十六年十二月、初代守武が父吉宗により江戸城本丸から移譲された書籍を基礎とし、代々の当主が集書につとめたことで形成されたものである。鈴木淳「田藩文庫考」⁽³⁾が引用する『田藩事実』⁽⁴⁾には、享保十六年十二月に吉宗から田安邸に移された書物の書目が列挙されるが、ここには、本稿にて取り上げている『五經正文』は見えず、田安家に入ったのがいつのことか、特定するのは難しい。ただし、「田藩文庫考」は、三代斉匡（一七七

九～一八四八）の集書の事績に言及した上で、本書にも捺される三顆の蔵書印、すなわち「田藩文庫」、「田安府芸臺印」、「獻英樓圖書記」のうち、「田藩文庫」は斉匡以後の可能性もあるが、少なくとも他の二つは（「獻英樓」が斉匡の堂号と考えられることもあり）、斉匡以前の蔵書も含め、恐らくすべて斉匡の時代に捺されたのではないかと推測する。また、大正元年（一九一二）に田安家で作成された蔵書目録（「御書物目録」⁽⁵⁾）の中で、「函番号「哲学一〇」の箇所」「礼記 刊 四冊」、「詩経 刊 二冊」、「書経 刊 二冊」、「易経 刊 二冊」と見えるものと、「函番号「法二」の箇所に「春秋（隠公元年ヨリ哀公十四年マデ） 刊 二冊」と見えるものとを合わせた十二冊が、成城大学図書館蔵『五經正文』に合致し、これに該当するものと推定される。すなわち本書は、少なくとも大正元年までは田安家に所蔵されていたものの、その後、同家から外へ出たものである⁽⁶⁾。

既に言及したように、本書は、全巻に渡って朱筆の訓点および校注が書入れられている。この書入れは、極めて整然と丁寧に成されており（誰によるものか特定はできないものの）、恐らくはしかるべき学者が、相応の身分の人物

に對し、見やすいように配慮しながら施したものでないかと推測される。当時にあつて学問は、世間の多くの人々にとつては教場で授けられるものであつただろうが、將軍や大名の子弟にとつては、指南役の學者と二対一の對面の場で伝授されるものだつただろう。以上の点からすれば、この田安家旧藏本『五經正文』は、田安家の男子の初等教育のために、儒者によつて訓点が入られた上で提供されたものだつたことが推測される。さらに、そのように考えれば、この書が『五經』であることにも大きな意味があるろう。というのも、儒家の学問とは、本来的に為政者のための学問、経世のための学問であるといつて良いからである。一方、鈴木淳氏が「田藩文庫考」で指摘するように、田安家は元來、次代の將軍職を養成するために起立された家柄であり、藏書の形成は、当主に帝王學を伝授するためであつた。田安家旧藏本は、いかにも田安家にあつて学ばれるのにふさわしい書物だつたのである。

ここで、本書に書入れられた訓点について、少しく触れておきたい。博士家を中心とする日本の学界においては、古くから長らく古注によつて『五經』が学ばれてきた。無論日本に新注がまつたく入つてこなかつたかといえはそう

ではなく、五山の僧侶は新注を学んだと考えられるほか、室町期に明経道の儒者として活躍した清原宣賢は古注とともに新注を学んだものとされる。さらに近世に入つて、朱子學が本格的に学問の對象として学ばれるようになり、新注が古注を凌駕していったものと推測される。そこで問題となるのは、この田安家旧藏本に書入れられた訓点は、古注と新注といずれに従つて附されたものか、という点である。すべての訓点を詳細に検証したわけではないが、恐らく本書の訓点は、新注に従つて附されたものと推測される。この点を顕著に伺うことができるのは、『毛詩』(『詩經』)の「葛覃」(国風・周南)の「言告師氏」句の訓点である。この句は、古注に従う場合(静嘉堂文庫藏永正十八年清原宣賢令写加点点『毛詩鄭箋』⁽⁷⁾)には、毛伝の「言我也(言は我なり)」とあるのに従つて「言れ師氏に告げらる」と訓ずるのに對し、新注に従う場合(寛永五年刊藤原惺窩加点点附訓本『五經白文』⁽⁸⁾)には、朱子集伝に「言辞也(言は辞なり)」とあるのに従つて「言に師氏に告げて」と訓ずる。この箇所を田安家旧藏本は「言に師氏に告げて」と訓じているのである。

また、田安家旧藏本の訓点と、前掲藤原惺窩加点点附訓版

本の訓点とを比べたとき、一見して田安家旧蔵本には（相対的に）振り仮名が少ないことが見て取れる。¹⁰思うにこれは、対面で行う伝授の場で用いられることを想定して作成された（口伝を想定すればすべてを書く必要はない）田安家旧蔵本と、教場で使用することを想定して作成された藤原惺窩加本との違いを反映してのことではないか。となれば田安家旧蔵本は、君主が帝王学を学ぶための本としての属性をまさに体現しているとはいえないか。

三、「松梅軒」の刊記をめぐる問題

ところで、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録（増補補訂版）¹¹』は、本版およびその覆刻版について以下の如く記述する。

五經正文 周易・尚書・毛詩・春秋・禮記各一卷
明翁溥校 明曆二刊（山形屋）白1019 大 六

同（後印）刊行者名削 大 六

同 同

同 安永八刊（覆明曆二、京、松梅軒河

南四郎兵衛等）白 大 六

この記述に従えば、①明曆二年に山形屋から刊行された版本、②①から刊行者名のみが削られた同版本、③安永八年（一七七九）に刊行された①の覆刻版、という三種の本があることになる。

田安家旧蔵本をこの記述に照らした場合（第一節に略述の書誌を参照のこと）、本書には明曆二年の刊記があり、しかも松梅軒河南四郎兵衛等（相版）の刊記（後見返し）を持つことから③に該当するかに思われる。しかしながら、本書のどこにも安永八年の覆刻を窺わせる徴証は見つからず、この点大いに疑問である。

実は、東京大学東洋文化研究所に所蔵される（目録の記載から安永八年覆刻版と推される）『五經正文』を検したところ、単黒魚尾、魚尾上に書名を「周易（尚書・詩經・春秋・禮記）正文」に作り、下象鼻に「松梅軒藏」とあるなど（行字数を含め、版心を除く版面はよく似るものの）、田安家旧蔵本とは別版であった。また、田安家旧蔵本の巻末にある明曆二年の刊記は無く、その代わりに以下の刊記が存する（『禮記』最終二五〇張裏）。

明曆二年丙申春三月舊版

安永八年己亥春二月再刻

中川藤四郎

西村市郎右衛門

植村藤右衛門

皇都書肆松梅軒

河南四郎兵衛

長村半兵衛

長村和助

小林庄兵衛

以上のことからすると、東文研本が上記③の安永八年覆刻版に該当し、田安家旧蔵本は③ではなく、②（①の刊記から版元の記載を削った①の後印本）だと考えられる。さらに、田安家旧蔵本に松梅軒の刊記があることから、明暦二年刊行の際の版木はいつの頃からか松梅軒の所有となり、それが刷られていたところ、安永八年になって同所でその覆刻版が作られたものと推定される（②から③の間にもう一段階が想定される）。如上の事柄は、田安家旧蔵本に松梅軒の刊記があることよって推定し得る事柄であるが、同版の内閣文庫所蔵本（昌平坂学問所旧蔵）、東京都立中央図書館所蔵本（闕『周易』、諸橋轍次旧蔵）にはこの刊記は無く（「明暦二年」の刊記のみ）、その点で田安家

旧蔵本は貴重であろう。

一方、田安家旧蔵本と同版の内閣文庫本および都立中央図書館本だが、「明暦二年」の刊記があつて「山形屋」という版元の名が見えないのは田安家旧蔵本と同様である。「山形屋」とある同版本は未だ見出せず、さらに探書を要する。

四、嘉靖三十一年翁溥校刻本の翻刻版に

ついて

さて、既述のように、田安家旧蔵本は、嘉靖三十一年翁溥校本（明版）を底本として明暦二年に翻刻刊行されたものである。実は、この翁溥校刊本を底本として日本で翻刻刊行された版本は、本版のほかにも複数が確認できる。以下に確認できたものを挙げておく。

一つは、大内本（大内版）と称される、版面が大きく（四周単辺二三・九×一八・二）、墨色の濃い極太の大字で刻された（每半葉八行毎行十五字）版本である。明暦二年刊本と同様、訓点は附刻しない。無刊記であるが、近世初期の刊行と推定される。内閣文庫に三点（昌平坂学問所旧蔵

本、紅葉山文庫旧蔵本など)の所蔵が確認されるほか、斯道文庫所蔵本(鳥取池田家旧蔵)などが確認できる。該版がなぜ大内本と呼ばれるのかは明らかではない。朝倉龜三『日本古刻史』¹²⁾は、底本である翁溥校刊本の年記が嘉靖三十一年(一五五二)で、これは大内家滅亡の後に当たっていることを指摘し、さらに寺田望南(一八四九〜一九二九)から聞いた、大内版『五經正文』についての「異説」として、以下の話を引く。明治十年(一八七七)頃に近衛家から売却された『五經正文』があり(所謂大内本である翁溥校刊本とは別のもの)、その版式墨色から享禄以前のものとおぼしく、表紙は朝鮮本に酷似し、しかもその巻尾には、「此書は当家に於て試刷せしもの一部進上候旨」大内家から近衛家に宛てた文書が添付してあったのを目撃したが、その後同書は行方知れずになったという。朝倉氏は、その上で、こうした朝鮮版に見紛う大内本の存在や大内家が外国と親密な関係を築いていたことなどを根拠として、後に誰かが、この翻翁溥校刊本『五經正文』を大内版と私称したのではないかと推測している。

さらに、翁溥校刊本を底本として日本で翻刻刊行された版本に、寛文五年(一六六五)に刊行された本がある。中

本よりやや幅の狭い(一五・二×一〇・九糎)郭内一・三×八・二糎)小ぶりの本で、句点および読点のみ附刻される(句点と読点はともに圈点で表されるが、位置によって両者を区別する)。刊記「寛文五年乙巳林鐘吉」の左に埋め木にて「大阪書肆 山内五郎兵衛」と刻される。山内五郎兵衛という大阪の書肆は、文化文政以降、『四書』や『五經』の刊行(および印行)をししばしば行っているように、従って寛文五年版『五經正文』の印行も、そのころだと推定される。本版もこの度成城大学図書館に収蔵の運びとなった(登録番号 Y335743~46)。

このほか、翻翁溥校刊本には、訓点を附刻する版もある。確認したのは斯道文庫所蔵の二点であるが(一点は松平披雲閣旧蔵)、この二点には、いずれも表紙の刷題簽に「林家改正點」とある(ただし加點者は不明)。刊記はなく、江戸前期頃の刊行かと推定される。振り仮名が極めて詳密で、特に『毛詩』には左傍にも多く訓が示される。

以上のほかにも、翁溥校刊本を底本として日本で翻刻刊行された版本が存在している可能性があり、さらなる調査を要する。また、林家改正點本の訓点についても、その性格について検討する必要がある。その際、田安家旧蔵本

の訓点を視野に入れることで、新たに見えてくる道筋もあるのではないかと考える。

おわりに

以上、田安家旧蔵『五經正文』について、その特徴について述べた。明暦二年本を含め、翁溥校刊本を底本として日本で翻刻刊行された『五經正文』の旧蔵者を改めて見渡すと、田安家のほか、紅葉山文庫、高松松平家、鳥取池田家など、かつての將軍や大名家の名が散見する。当時において、『五經』が彼らの教養として学ばれたことがわかるとともに、翁溥校刊本が底本として重宝されたことが窺われる。就中、田安家旧蔵『五經正文』は、そうした近世における『五經』の享受のあり方を顕著に反映したものといえよう。版本学、訓読史、学問史、文化史など、さまざまな側面の研究に資する資料であり、本書が成城大学図書館に収蔵されたことを心より嬉しく思うとともに、今後大いに活用されることを願う。いや、本書に触るだけでもいいかもしれない。かつて大名が手に取った、その本を手にする感動を味わうことができる。その意味で、本書の存在は

感動的である。

注

(1) 田安德川家の蔵書および蔵書印については、人間文化研究機構国文学研究資料館編『田藩文庫目録と研究―田安德川家伝来古典籍―』（日本書誌学大系九四、青裳堂書店、二〇〇六年）を参考にした。現在、田安德川家の蔵書は、国文学研究資料館や慶應義塾図書館に寄託されるほか、国会図書館や国立公文書館などにも分散して所蔵されている。

(2) 水玉紙は、漉き上げた紙の上に色染めした紙料を薄く全体に重ね漉きして、それが乾く前に上から水滴を垂らして、その衝撃により水玉模様を加えたものという。佐々木孝浩氏によれば、古い使用例が見つからず、十七世紀に発明された加工法のように、本文の料紙にはあまり向かないらしく、表紙や色紙・短冊で見かけることが多いという（慶應義塾大学 Future Learn「古書から読み解く日本の文化・和本を彩る和紙の世界」）。

(3) 前掲注(1)書所収。

(4) 『田藩事実』は、田安家の儒臣であった大塚孝緯、長野清良によって編纂された田安家の記録。天明三年（一七八三）五月成立。

(5) 前掲注(1)書に翻字されて掲載される。

- (6) 前掲注(1)書に影印されて掲載される、昭和十三年(一九三八)三月二十八日の「徳川田安家御旧蔵入札目録」(札元 巖松堂書店古典部)は、百四十二点の書目を提示するが、本稿で取り上げる『五經正文』らしきものは見えない。ただし、書目のあとに「其の他和漢書 数千冊」と記すので、この中に含まれている可能性はある。当該田安家旧蔵『五經正文』に捺された蔵書印に「時枝藏書」があるが、本書の中から、昭和十三年六月十一日に時枝満康なる人物(未詳)が「毛詩鄭箋」(三円)と「五經」(十円)を購入した際の高島屋発行の領収書が見つかった。残念ながら書肆の名が記されていない。三月二十八日の売立の後、六月十一日に高島屋での即売会で時枝氏に購入されたか。
- (7) 古典研究会叢書『毛詩鄭箋』(汲古書院、一九九二年)の影印による。
- (8) 長澤規矩也編『和刻本経書集成』第一輯(汲古書院、一九七六年)の影印による。
- (9) 古注と新注における「言」字の解釈の違いについて論じたものに、佐藤進「藤原惺窩の経解とその継承―『詩経』「言」「薄言」の訓読をめぐって―」(『日本漢文学研究』第五号、二〇一〇年三月)がある。
- (10) 藤原惺窩加原点において、『詩経』の経文の訓読に文選読みが採用されており、そのため、特に『詩経』におい

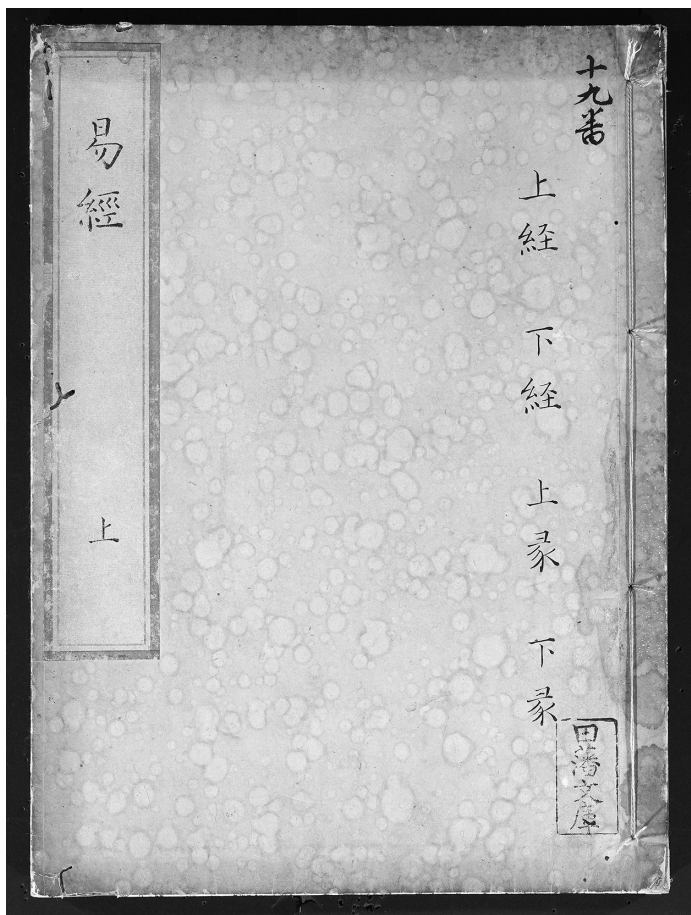
て左傍訓が多い。

- (11) 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録(補訂版)』(汲古書院、二〇〇六年)。なお、当該箇所についての補訂として「明暦二年刊↓明暦三年刊」とするが、「明暦二年刊」のままであるべきだと考える。

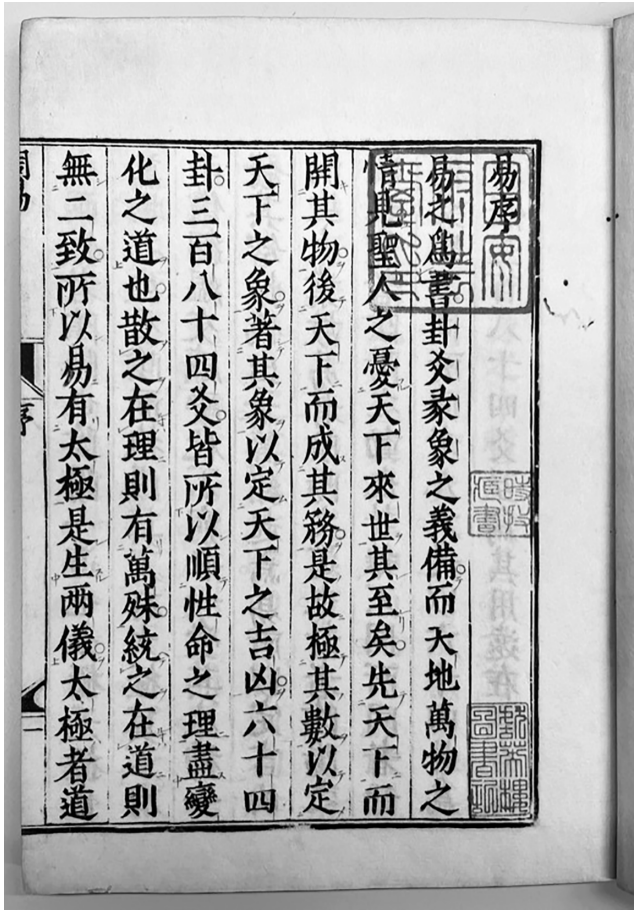
- (12) 朝倉龜三『日本古刻史』(国書刊行会、一九〇九年、八〇頁)。

- (13) 道春点は、惺窩点と比較して、『詩経』における文選読みがさらに徹底されている点、前掲注(8)論文に指摘がある。

(付記) 翁溥校刻本の翻刻版について、高橋智氏よりご教示を得た。記して謝意を表します。

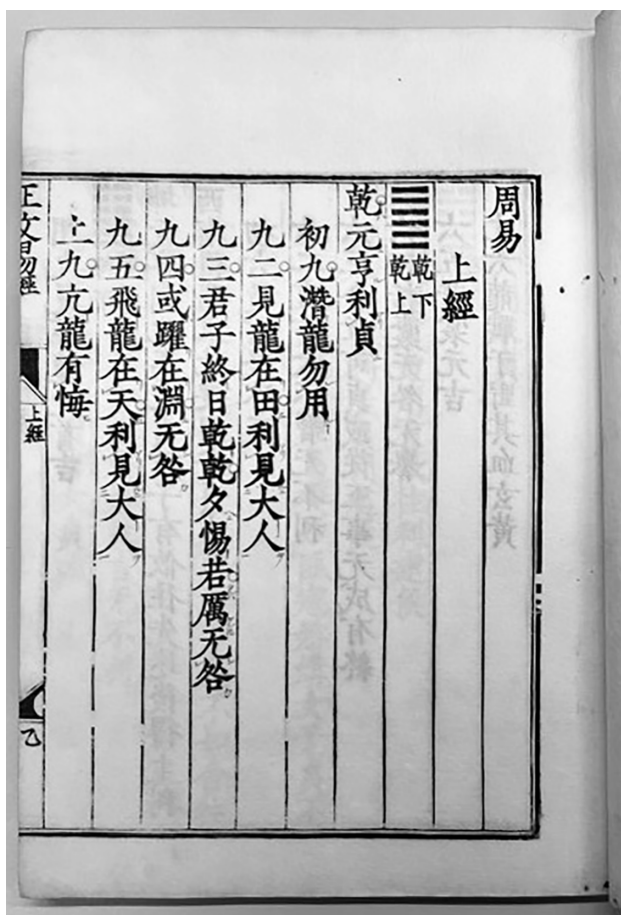


図版 1 田安德川家旧蔵明暦二年刊後印『五經正文』
第 1 冊表紙



易序
 易之爲書。卦爻象象之義備。而天地萬物之
 情見。聖人之憂天下。來世其至矣。先天下而
 開其物。後天下而成其務。是故極其數以定
 天下之象。著其象以定天下之吉凶。六十四
 卦。三百八十四爻。皆所以順性命之理。盡變
 化之道也。散之在理。則有萬殊。統之在道。則
 無二致。所以易有太極。是生兩儀。太極者道

圖版 2 同 第 1 冊「易序」首



図版3 同 第1冊『周易』本文巻首

書刻五經正文後

天地之道聖人之蘊具載六經舍是則修身齊
家治國平天下無所於法舍是而欲以其術持
天下者異端也孔子懼斯文之或喪翼易刪詩
書定禮樂而作春秋及門之徒身通六藝者七
十有二人百世之下知天地之綱與吾人之紀
得免於夷狄禽獸者聖人之澤也後世訓詁日
益多而六經之旨益用以晦經生儒士窮年兀
兀至皓首不能通一藝豈不以徒事估畢而忘
知類通達之效哉夫歠醢者棄糟粕得魚兔者

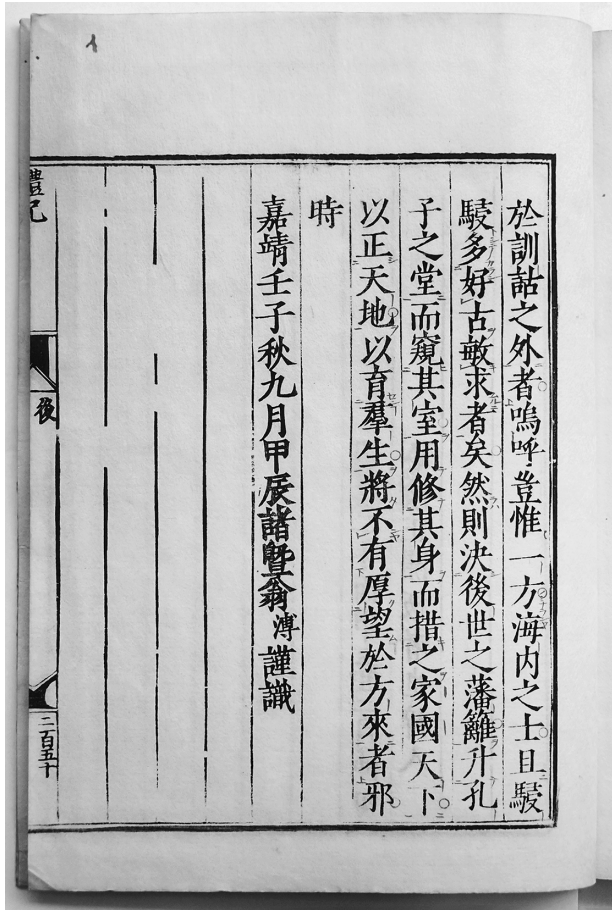
估

書經

後

三島九

図版 4 同 跋文首



於訓誥之外者嗚呼豈惟一方海內之士且駸
駸多好古敏求者矣然則決後世之藩籬升孔
子之堂而窺其室用修其身而措之家國天下
以正天地以育羣生將不有厚望於方來者邪
時

嘉靖壬子秋九月甲辰諸暨翁溥謹識

禮記

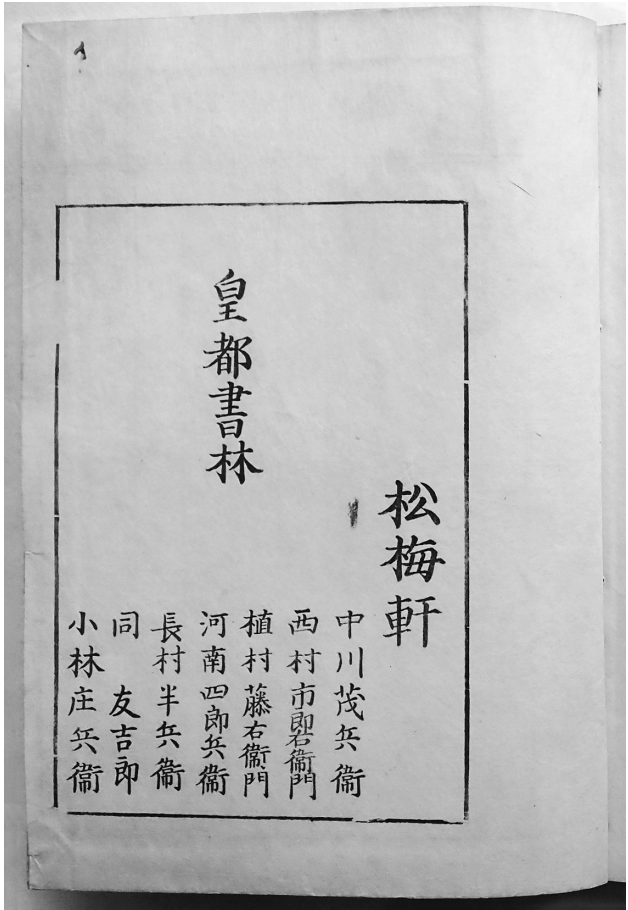
後

三百五十一

圖版 5 同 跋文尾



図版6 同刊記（第12冊『禮記』最終張裏）

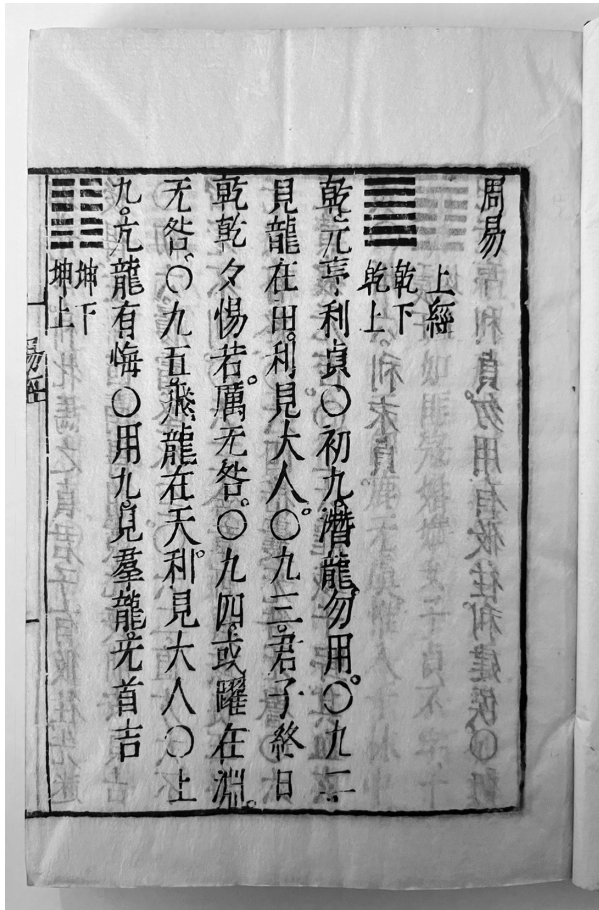


皇都書林

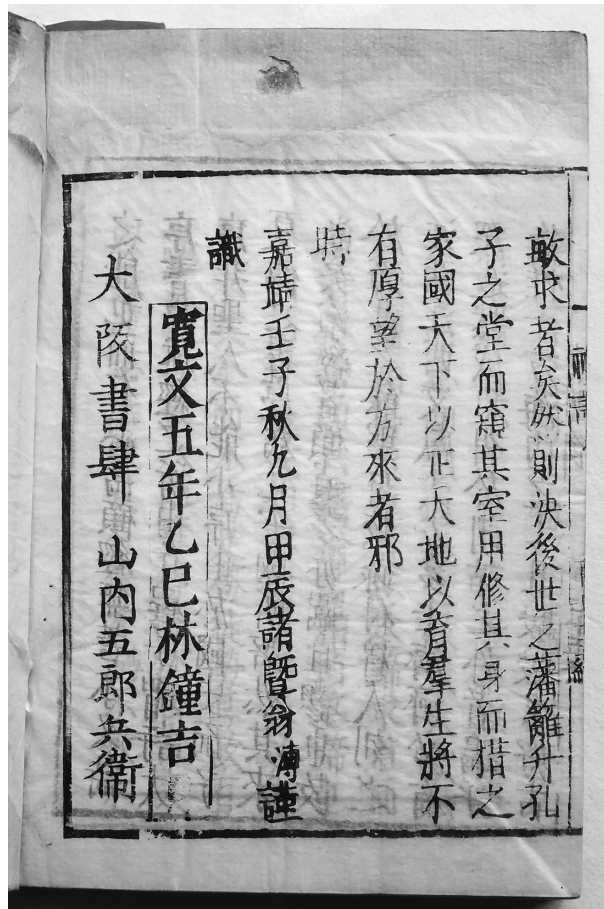
松梅軒

中川茂兵衛
西村市郎右衛門
植村藤右衛門
河南四郎兵衛
長村半兵衛
同友吉郎
小林庄兵衛

図版7 同 刊記(裏見返)



図版 8 寛文五年刊後印『五經正文』(成城大学図書館蔵)
第1冊『周易』本文卷首



敏求者矣然則決後世之藩籬升孔子之堂而窺其室用修其身而措之家國天下以正大地以育羣生將不有厚望於方來者邪

時
嘉靖壬子秋九月甲辰諸暨翁溥謹

識

寬文五年乙巳林鐘吉

大阪書肆山内五郎兵衛

図版9 同 跋文尾・刊記